

平成26年2月5日発行(毎月5日1回発行)  
第54巻2月号(通巻655号)

# 風土



2

破魔矢  
神蔵器

太平洋真二つにして初日出づ

的射ぬく音一つして弓始

背の低き巫女より天の破魔矢受く

初夢に音なし色なし神田川

思ひ出

一夜飾買ふ青邨にまみえたり

心臓のあり綿虫の漂へる

柀にきらりと母のなみだかな

文字書けばすなはち遺書や石路の咲く

笹鳴や母にはよきことのみ伝へ

点滴の一・二・三・四滴寒に入る

冬けやき四五本先の喫茶店

妻の忌やイエス・キリスト誕生日



# 竹間集

同人作品



秋 薊

小野寺節子

秋あざみ見過ごす人がまた一人  
めまぐるし天変地異や神無月  
家康の産井に老いの息白し  
秋行くや時に己れを忘れぬる  
立冬の光陰里の田や畠  
庭師には庭師の都合松手入  
立冬と言ふ二た文字の置き処

立 冬

田村すゝむ

立冬や午後に日当る窓一つ  
名山を並べて安曇野雪を待つ  
枯蓮の一つ一つの命かな  
月に雲生きる証の俳句詠む  
控目に咲いてゐるなり冬苺  
残る世を素直に生きて冬に入る  
大いなる山湖静かや鳥渡る

木の洞に

瀬戸

悠

波音の砲台跡や帰り花  
吊るし干す刺網年を惜しみけり  
蠡斯鳴いて家紋十字の湯桶かな  
石路明りして北側に火灯窓  
いとど跳ぶ納骨堂の暗がりよ  
花道に狐六法日短か  
木の洞に在す観音冬に入る

冬来る

塩田 博久

錦秋や上野に洛中洛外  
末枯れて夕日の中の百合大樹  
地下街やまづポスターに冬の来て  
くろぐろと街川よどむ冬はじめ  
郵便受にチラシばかりや日短か  
咲き初めし白山茶花を供華とせむ  
風邪籠りテレビの中を人動き

日向ぼこ

田中佐知子

芭蕉忌の車窓を伝ふ雨霰  
押し強き鯖鮨北山時雨かな  
丈山の楓は青きまま冬に  
底冷えや秘仏の闇に眼の慣れて  
堂の闇線香の火の冴ゆるかな  
冬虹の向かうに子らの暮らしあり  
日向ぼこどちらが先に逝かんかな

モアイ像

工藤ミネ子

露天湯に置かれて秋の蠅叩き  
並び立つ畦木にモアイ像を見て  
照らさるる雲も生きもの十三夜  
日向より声を出したる終の虫  
初霰子らのスキップ迎へけり  
たたまるる水の囁き初氷  
出羽丘陵雪を乗せたる畑仕事

今朝の冬

柴田 久子

山門といふ秋風の通り道  
秋うらら子供に還る科学館  
老い上手老い下手もゐて文化の日  
B4の芯のスケッチ大枯野  
姐の音の小走り日短し  
夫の歩に合はせて歩く今朝の冬  
百合鷗水がせましと飛び立ちぬ

冬の蝶

宮川みね子

くれなゐに憂ひをふかめ冬薔薇  
流れゆく雲一に日のいろ木の葉舞ふ  
いまいちど羽閉ぢなほす冬の蝶  
夕暮の柚子の空あり木守ゐる  
指先に土の湿りや寒葵  
ひと間づつ硝子みがきて冬日和  
風邪の身の耳にふるさとよりの活  
言ひかけしことばのみこむ冬の虹  
リハビリへ坂日の当たる四日かな  
青き空辛夷大樹に薔満つ

# 山河集

同人作品



神蔵 器選

参道にさくら落葉や釈迦如来

布施まき子

冬の蝶アトリ工館に削り鑿  
考へる前に歩みて小春かな  
石路の花水琴窟に音を待つ  
神の留守 M R I の扉押す

草一本ひきては秋を惜しみけり

柿沼 盟子

歩道橋に踊り場ふたつ小鳥来る  
雑炊や上座下座に灯の置かれ  
鼻風邪や原稿用紙の枺小さく  
初時雨電話の鳴らぬ午後長く

冬めきし丸き古墳や勝鴉

奥田 茶々

立冬の朝の足指じゃんけんぼん  
三日月の隠るる漢江冬めけり

一夜風呂冬薔薇三千浮かばせて  
木の実降る花袋旧居に針坊主

木枯しの切先もてる火の匂ひ

間島あきら

雀蛤に単線駅の昼の月  
萩刈つて秋篠寺の月日かな  
鳥辺野を秋の時雨と歩きをり  
体脂肪率二十三パーセント冬に入る

一水に揺るる灯や枯蓮

工藤はるみ

さざ波に戯る鴨の一羽かな  
鍛錬会師と共に老い秋惜しむ  
白鳥を待つ城沼のゆめうつつ  
念仏はすべての入口秋惜しむ

◇特別作品◇(抄)

秋の声

大森 尚子

鳳仙花 三国 湊の 思案 橋  
月の 船遊 郭跡 の 出入口  
水澄むや遊女思案の橋たもと  
秋天や大正ロマンの風の声  
戦国の太き流れの秋の川  
水運を握る豪商天高し  
瀧谷寺 秋風 匂ふ 鐘楼 門  
九つの石のころや秋の寺  
散居村屋敷 森より秋の声  
吾が影の小さくなりし秋の雲

# 風土独語／神蔵器



敬へることのしあはせ石路の花

浅田 光代

もとより人生に於いて尊敬し、うらやましく思ってくれるような人が一人でも居てくれたら、その人は大変幸せな人であり、反対に尊敬する人に一生めぐり合わず終る人は不仕合せというより気の毒な人である。

敬える人は直接間接に長年指導を受け光先生や恩師などでも勿論よいわけであるが、私の場合にすでに故人。しかし私の尊敬の心に変りはない。

先日、十二月二十五日、私は句会へ出席のため、新宿から小田原行の急行に乗車した。急行はかなり混んでいたが、シルバー席に一つだけ空きがあつて、私は幸運にもすべり込めた。

電車は間もなく発車した。ふと見ると前のシルバー席に、三十歳ぐらいの男の人が居眠りをしている。その会社員ふうの告い人の足元に定期券が落ちていた。

新宿で降りた先の乗客のものかと思つたがそうでもないらしい。今乗車したばかりで、そんなに直ぐに眠れるものか、これは寝たふり、「たぬきになんか教えてやらないよ」、私は眼を閉じてしまった。

急行は間もなく代々木上原に着いた。シルバー席の彼の一番近くのドアが開いて、何人かが下車し、何人かが乗つて来た。青年は微動だにしない。私はやつと席を立ち、よるめきながら彼に近づき、膝頭を叩き、定期券を指差した。

彼は次の駅下北沢で席を立ち、両手を合わせ、びよこと頭を下げて下車して行つた。

こんなことを書く気はなかつたが、私はこの頃、気短に怒りつぱくなつた。もしあのまま青年に教えてやらなかつたら、あの青年が定期券を失つた以上に、私は自分の心の貧しさにあきれかえり、苦しめられるところであつた。

あの時、私も眠つたふりの眼裏に見えたものは、眠りこけている青年でもなく定期券でもなかつた。わが心の師であつた。

人の波の続く冬日の茶碗坂 生田恵美子

茶碗坂は清水寺へと続くもう一つの坂道で、清水坂が表参道、茶碗坂は裏参道になっている。しかも、この場所は京都の名士たちが集まる伝統文化の結晶とも言えるところである。

始まりは八世紀のころ、僧行基によつて清閑寺村で製陶されたが、その場所がのちに茶碗坂といわれるようになった。その後には茶碗屋九兵衛によつて作られた陶器に五条坂一円で金、赤、青の彩色を施し、陶器の製作をし、その出来上つた陶器の手法を「清水焼」と名づけて清水焼の歴史が始まつた。

なお、昭和四十年頃、陶芸作家をはじめ多くの陶工が、山科に「清水焼団地」を造成し、集団移住をしたそうだが、たとえ東山に窯の煙が絶えても、清水焼の伝統は絶えることなく、ますます人々に愛しつ、づけられている。

京の紅葉は意外に遅い。おそらく十一月下旬ころか。生田さんご夫妻は一泊二日ぐらいの京の旅に出たようだ。先ず一日目は高雄をはじめ槇野・梶尾・清滝、あるいは嵯峨野・嵐山などの紅葉の名所を訪れ、堪能し、二日目は三千院から寂光院、大原・八瀬などの歴史や紅葉を楽しみ、終りに清水寺に参詣し、帰途茶碗坂に足をとどめたのであろう。ゆうゆうと花をたのしみ、人生を楽しむ京の旅であったようだ。(以下略)



# 風土集



## 神蔵器選

藁塚の影のをさなき奈良日和 高槻 浅田 光代

二月堂 参籠宿所の烏瓜

疑問符のやうに綿虫てのひらに

冬紅葉伐折羅の喝が耳の奥

敬へることのしあはせ石露の花

冬田道 屈託一つ 曳き戻す 津山 生田 作

あぢさゐの冬芽に朝の陽の届き

柴垣を割つてをとこの冬帽子

大根引く動かぬ雲に日の当たり

半眼の鷺畦にゐる小春かな

人の波の続く冬日の茶碗坂 津山 生田恵美子

立冬の坂の途中に一味買ふ

和蠟燭の色絵三色冬に入る

竹幹に冬の色発つ大覚寺

末の子のリップサービス室の花

一瞬の怠惰に鵲の撃たれけり 川崎 豎山 道助

巖頭に述志の遺文滝涸るる

石筍の音なく育つ冬籠り

マリリンと決まる猫の名青郵忌

血管の六百キロと冬に入る

霧の朝気魂に精気貫けり 相模原 榎本ふじえ

ふだん着で染まぬ世相や葉鶏頭

『明暗』や未完の書にて漱石忌

岩座に不動滝とて実千両

トンネルを抜けて紅葉の軽井沢

さよならは片手で上げし冬帽子 いわき 森高 武

冬らしき海となりたる風の波

誰一人寺領にをらず師走かな

銅鐸を叩けば鴨の鳴きにけり

日の差して御堂を囲む冬紅葉